

## 【追悼文】

### 菅野俊作さんを悼む

安孫子 麟

昨年11月29日、菅野俊作さんが亡くなられた。文字通りの急逝で、訃報を受けたときは言葉を失った。菅野さんは、前夜、中国の江沢民主主席を仙台に迎え、そのレセプションに出て主席とも握手を交わし、長年の心の重荷なのにほどかを下して床についた。そしてそのまま朝めざめることなく亡くなつた。‘人は、生きてきたように死ぬ’私は痛切にそう思った。

菅野さんは、若い会員は知らない方が多いと思うが、仙台で開かれた村研の創立大会、それから記念すべき泊まり込み大会の嚆矢である第6回大会鳴子大会での、共通課題報告者で、初期村研では、農業経済学分野の若手を代表する会員であった。創立大会のときは、31歳だった。このときの論題は「農地改革と村落構造-岩手県大野村晴山家を中心に-」というものであった。鳴子大会での論題は、「明治以降東北農村の村落構造」で、水稻単作農村と山村の二類型について、自らの実証研究を踏まえて、それを理論化したものである。その山村の事例は、大会会場となった鳴子町鬼首地区であったため、参加者に与えたインパクトは非常に強かった。また、水田農村の事例とした南郷町練牛地区の、町村制以前の村落構造の実証分析は、鮮やかな把握をみせていて圧巻であった。

この二つの報告だけでも、菅野さんの研究態度、研究方法がよく理解できる。徹底した資料分析と、それをつねに普遍化し理論化する態度が、菅野さんの研究を貫いていた。私は、1950年、中村吉治ゼミの学生として院生だった菅野さんに接して以来、煙山村調査、南郷町調査でいつももっとも近い共同研究者として教示をうけていたし、農林省委託の山村調査にもほとんど同行していた。また、東北大農研では一緒に助手として机を並べていた。この半世紀近いつき合いのなかで、私が一番影響を受けたことは、徹底した資料分析ということだった。かつて中村吉治先生が、「菅野は原稿の締切がきても調査に行く」といわれたが、それぐらい資料の集め残しを気にしていたのである。

村研大会への参加は、30回あたりまでかと思う。その少し前から、菅野さんは日中友好に多くのエネルギーを注いでいた。来日した江主席は、東京以外は仙台と札幌だけを訪れたが、仙台は魯迅が東北大学に留学していた縁であった。菅野さんはその魯迅記念会の日本側の代表として、日中両国での魯迅記念事業に最も深く関わっていた。夫人許広平を始め魯迅の四代にわたる遺族との交遊も深めていた。

菅野さんの中中国との関わりは、上海の東亜同文書院大学に学んだことから生じている。同大の校舎は、中国交通大学の建物であった。戦争の拡大とともに交通大学は校舎を残して奥地に追いやられ、そこに同文書院が入ったのである。江主席は、その交通大学出身である。菅野さんは、そのことも一言詫びたかったのだろう。江主席と握手したとき、"お詫びします"と話している。

菅野さんは退官後、借財をして中国留学生のための寮を建てた。寮は思源寮と名づけられた。それは、交通大学の碑にあった「飲水思源」の語からとられている。自らを振り返った時、育ててくれた中国への恩返しと、日本人としての中国へのお詫びと、その二つからの命名だった。

今年1月24日、偲ぶ会の開会の辞で私は詞を献じたが、次のように結んだ。  
「・・・今ハ唯、遺影ノ前ニ涕歎シ、詞ヲ漱ギ、酒ヲ薦ム。冀ハクハ、  
精靈來リテ源ヲ思ヒテ飲セヨ」

彼は、生きてきたように死んだ。

淋しさの限りは知らず氷雨降る

麟